

絵巻 『道成寺縁起』 を読み解く 〈安珍清姫伝説を追って〉

——平成二十五年度〜二十七年度研究活動より——

尾道市立大学伝承文化研究会

はじめに

本稿では、平成二十五年度にはじめた絵巻研究の中から、『道成寺縁起』に関する考察をまとめた。特に、読解を始めた当時（平成二十五年五月二十三日）、室町時代の絵巻を中心に卒業論文をまとめた。現在本学大学院修士課程の肥田伊織を先導役に、約一〇名の学生達が研究会で意見交換をしながら読み進めてきた。

本絵巻に描かれた物語は能、歌舞伎などの様々な伝統芸能の演目でも知られ、安珍清姫伝説におよぶ物語群として日本文学、民俗学、芸能史の先行研究でも多くの点が論じられてきた。しかし、改めて現代の日本文化の様相に眼を向けると、従来どおり誰

もが知る物語とは言えない時代になりつつあることにも気づく。

そこで、研究会では約二年間、学生達を中心に本絵巻の読み解きを進め、その成果を一般公開の形で報告し、資料展示をおこなった。さらに、当研究会は日頃よりフィールドワーク（以下FW）も並行している点から、物語の舞台である道成寺への探訪も不可欠であった。ここでは、その成果もまとめておく。

おおよそ、伝本の系統に準じるならば、ここに取り上げた資料調査と実地調査に基づく指摘は、先行研究に対し十分言葉を尽くした報告とは言えない。しかし、学生達の目線から在地伝承を支える世界を多角的に見直すことは、現代まで伝えられてきた本話

の持つ魅力に迫り得るものと考える。以下、一連の研究活動における担当者を記しておく。

【執筆】

はじめに（藤井佐美）

一、伝承説話の概要（肥田伊織）

二、絵解き・上巻

1、清姫の愛（肥田伊織）

2、異時同図法に見る出会いと別れ（肥田伊織）

3、変化する清姫の姿（小塩里緒菜、荒谷茜）

F W 報告 1（肥田伊織）

三、絵解き・下巻

1、道成寺の由来（荒谷茜）

F W 報告 2（荒谷茜）

2、鐘楼の位置（新谷咲）

F W 報告 3（武下明日香）

3、蛇の描き方 — 『ひだか川』との比較 —

（荒谷茜）

4、身を焦がす恋の行方 — 炎と涙 —（新谷咲）

5、結末 — 転生と供養 —（原知里）

F W 報告 4（平田美月）

F W 報告 5・地図（肥田伊織）

おわりに — 回顧 —（本稿執筆学生全員）
参考文献（肥田伊織）

付記（藤井佐美）

【発表】

尾道市立大学藤井研究室公開研究報告会

（平成二十七年三月七日、尾道商業会議所記念館）

安藤美里・荒谷茜・大塚真弓・小塩里緒菜・小

野葵・新谷咲・武下明日香・原知里・肥田伊織・

平田美月・藤井佐美

【展示】

尾道市立大学藤井研究室・研究資料展示

（平成二十七年七月二十八日～八月十一日、尾

道市立大学サテライトスタジオ）

肥田伊織・藤井佐美

【調査作業】

右記発表担当者全員

宇戸谷航輔・高橋七瀬

【F W 実施】

荒谷茜・武下明日香・平田美月

（平成二十七年八月二十二日～二十三日）

肥田伊織・藤井佐美

（平成二十七年八月二十八日～二十九日）

一、伝承説話の概要

絵巻『道成寺縁起』（以下『縁起』）の成立背景は不明ではあるが、室町時代後期とされている。下巻奥書には、天正元年（一五七三）十二月に足利義昭が日高郡由良興国寺に滞在した折、『縁起』を高く評価して禄を与えた際の書判が花押とともに確認でき、この頃には成立していたことが分かる。

『縁起』（流布本）は、『大日本国法華経験記』（以下、『法華験記』）下一二九「紀伊国牟婁郡の悪しき女」をはじめとして、『今昔物語集』（以下、『今昔』）十四「紀伊ノ國ノ道成寺僧、寫法花救蛇語・第三」、『元亨釈書』十九願雜四・靈恠・安珍にも類話が見え、近い内容は平安時代にまで遡ることができる。そして、いずれも仏教説話的要素が色濃く、『縁起』も同様に法華経の功德を説く内容である。

一方、『縁起』と同時代と推定される『賢学草子』、『道成寺絵詞』、そして本稿でも取り上げる近世初期成立の奈良絵本『ひだか川』は御伽草子的な性格を持ち、『縁起』を骨子としながらも展開の違いから異本に分類される。

一連の道成寺物語の伝承を追うと、民間に語ら

れていた先行の類話が室町時代の物語隆盛の波に乗り、一方は寺の縁起絵巻として定着し（流布本）、一方は仏教説話的要素を切り捨てて都風な読み物へと脚色されていったと推測される（異本）。

その後、同話は能・歌舞伎をはじめとする芸能、わらべ唄・雨乞い踊り・山伏神楽、絵画作品や映画など、多様な広がりを見せることになる。そして、道成寺では現在も物語の絵解きがおこなわれており、稀少な文芸の伝承性を間近に見ることが出来る。

しかし、この『縁起』は寺の起源や本尊を語るのではなく、いわゆる道成寺を舞台とする説話の一つであり、男女の愛執をテーマとして法華経の功德を説く物語である。詞書とともに画中詩が多く、口語体の台詞からも各場面は精彩に富む絵巻となっている。

同話の伝承系譜をたどると、『古事記』の肥長比売説話とも類似性が見いだされ、関連する世界は神話にまで及ぶ。そして、原拠となるテキストの存在や数多の類話も推測される中で、特に上記三本との相違等も様々に検証されてきた。

二、絵解き・上巻

ここでは、改めて『縁起』と近しい文字資料『法華験記』『今昔』『元亨釈書』を比較し、物語の骨子を同じくするものの異本とされる絵画資料『ひだか

川』にも触れながら、絵を持つ資料と持たない資料の物語展開の各特徴を見ていくこととする。なお、詞書や画中詩の配置は比較に応じ適宜入れ換えた箇所もある。

表I・本文比較

	縁起	法華験記	今昔	
<p>【詞書】醍醐天皇御宇、延長六年 <small>戊子</small>八月比、自奥州、見目能僧之淨 衣着が紀伊国室の郡真砂と云所に宿 あり。此亭主、清次庄司と申人の嫁 にて、相隨ふ者数在けり。</p>	<p>二の沙門あり。一人は年若くして、 その形端正なり。一人は年老いた り。共に熊野に詣り、牟婁郡に至 りて、路の辺の宅に宿しぬ。その 宅の主は寡婦なり。兩三の女の従 の者を出して、</p>	<p>【詞書】彼僧に志を尽し痛けり。 何の故と云事を、あや敷までにごそ 覺けれ。然に、件の女房、夜半計に 彼僧のもとへ行て、絹をうち懸、制 伏て云様、</p>	<p>二の僧を宿り居らしめ、志を致し て勞り養へり。ここに家の女、夜 半に若き僧の辺に至りて、衣を覆 ひて僧に並び語りて言はく、</p>	<p>此ノ家ノ主ノ女、宿タル若キ僧ノ美麗ナ <small>ルヲ</small>見テ、深ク愛欲ノ心ヲ起シテ、勲ニ 勞リ養フ。而ルニ、夜ニ入テ、僧共既ニ 寝ヌル時ニ、夜半許ニ家ノ主ノ女、窃 <small>ニ</small>此ノ若キ僧ノ寝タル所ニ這ヒ至テ、衣ヲ 打覆テ並ビ寝</p>

口説く	別れ
<p>【詞書】「わら我家には、昔より旅人など泊らず。今宵、かくて渡せ給ふ、少縁事にあらず。誠、一樹の影、一河の流、皆先世の契とこそ承候へ。御事を見まいらせさぶらふより、御志し浅からず。何かは苦敷候べき。只、かくて渡せ給候へかし」と強に語ひければ、</p>	<p>【詞書】女房、痛恨ければ、僧の云、「此願、今二、三日計なり。難無参詣遂、宝弊を奉り、下向の時、哪にも仰に随ふ」と出てにけり。大方、此事思も寄ぬ事なれば、弥、信を致しけり。其後、女房、僧の事より外は思はず。日数を算て、種々の物を貯て待けれども、</p> <p>【挿絵】 図1</p> <p>【画中詞】 争か偽事をば申候べき。疾と参候べし かならず待まいらせ候べし 先の世の契りのほどを御熊野神のし</p>
<p>我が家は昔より他の人を宿さず。今夜宿を借したるは、由るところなきにあらず。見始めし時より、交り臥さむの志あり。仍りて宿せしむるなり。その本意を遂げむがために、進み来るところなりといふ。</p>	<p>女大きに恨怨みて、通夜僧を抱き、擾乱し戯咲せり。僧種々の詞をもて語り誘へたり。熊野に参詣して、ただ両三日、燈明・御幣を献りて、還向の次に、君が情に随ふべしといへり。約束を作し了へて、僅にこのことを遁れて、熊野に参詣せり。女人僧の還向の日時を念ひて、種々の儲を致して相待つに、僧来らずして過ぎ行きぬ。</p>
<p>「我家^{ニハ}更^ニ人^ヲ不宿^ス。而^{ルニ}今夜、君^ヲ宿事^ハ、昼、君^ヲ見始^ル時^{ヨリ}、夫^ニセムト思^フ心深^シ。然^{レバ}君^ヲ宿^{シテ}本意^ヲ遂^ム」ト思^フニ依^テ、近^キ来^ル也。我^レ、夫無^{クシテ}寡^也。君、哀^ト可思^キ也。」ト。</p>	<p>女、大^キ恨、終夜、僧^ヲ抱^テ擾乱^シ戯^ルト云^{ヘドモ}、僧、様^トノ言^ヲ以^テ、女^ヲ誘^{ヘテ}云^ク、「我、君^ノ宣^フ事^ヲ辞^スル^{ニハ}非^ズ。然^{レバ}、今、熊野^ニ参^テ、兩三日^ニ御明[・]御弊^ヲ奉^テ、還向^ノ次^ニ、君^ノ宣^{ハム}事^ニ随^{ハム}ト」約束^ヲ成^{シツ}。女、約束^ヲ憑^テ本^ノ所^ニ返^ヌ。夜明^{ヌレバ}、僧、其^ノ家^ヲ立^テ熊野^ニ参^ス。其^ノ後、女^ハ約束^ノ日^ヲ計^{ヘテ}、更^ニ他^ノ心無^{クシテ}僧^ヲ恋^テ、諸^ノ備^{ヘテ}儲^ヲ待^ツニ、僧、還向^ノ次^ニ、彼^ノ女^ヲ恐^{レテ}、不寄^{シテ}、思^他ノ道^ヲ逃^テ過^ス。</p>

るべもなどながるべき
御熊野ノ神のしるべと聞からになを
行末のたのもしきかな
これまでにて候。下向を御待候へ

1、清姫の愛

『縁起』が纏められた当時、人々は安珍と清姫（以下、諸本比較上、人名統一）の物語をどのようにとらえていたのだろうか。

『法華験記』『今昔』の成立より少し時代を遡る平安初期、恋愛はきわめておおらかであった。時代が下り平安中期になると、『源氏物語』に見えるような通い婚が通例となり、妻は夫を待つことしかできない時代となった。そして、鎌倉から戦国時代にかけて家父長制が成立すると、社会全体に妻が夫に嫁入りする習慣が広まり、妻の不倫は厳しく罰せられるようになる。

ここで、『法華験記』（平安中期）と『今昔』（平安末期）の比較から、清姫が安珍に言い寄る場面（表I寝所へ・口説く）に注目すると、両書とも清姫が安珍を家に泊めた理由を一目惚れによるとして

いる。しかし、時代の下る『今昔』の方が「深く愛欲の心を起して」とあるように、清姫の愛欲を前面に押し出す。以後の展開は両書とも類似するが、清姫の心情の描かれ方にはこのような変遷を読み取ることができ。一方、『縁起』はその理由を前世からの縁によると説明しているのである。

2、異時同図法に見る出会いと別れ

絵巻は、その形状から天地の高さに限界があるが、画面の水平方向の長さには制約がない。物語の展開を横長の画面に劇的に表現することで、時間的な推移を盛り込むことも可能である。一枚の挿絵のうちに同一人物を複数回登場させ、その間の時間的推移を示す異時同図法という画法は、この『縁起』でもおおいに確認できる。中でも上巻一段には、二人の出会いと別れが一図に収められている。

絵巻は右から開き読み進めることが通例であるが、『縁起』ではまず別れの場面が右前方に描かれており、寝所で二人が語らう様子が左奥に描かれている。詞書の展開に準じるならば、二人は寝所で語らい、その後に分れるのが自然であるが、挿絵は詞書と逆行している。このように不自然な流れに見える点を解釈するならば、別れの場面を先に描くことによって、その時二人が交わした再会の約束こそが悲恋の始まりとなった点を強調する表現とも、読み取ることができる。(図1)

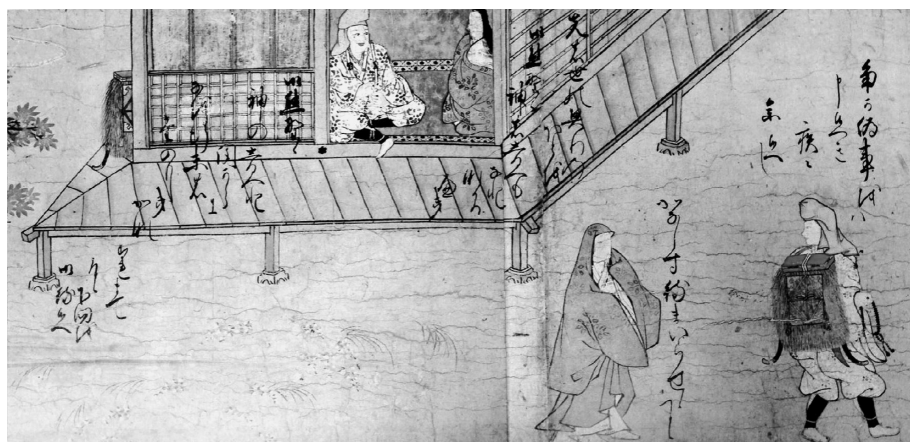
3、変化^{へんげ}する清姫

二、三日で帰ると約束した安珍が清姫の元に戻ることにはなかった。ここでは、安珍を追いかけながら蛇に変化していく清姫の姿に注目する。まず、清姫は道行く人に次のように尋ねる。

なふ先達の御房に申候。我わが男にて候法師か
けご手箱の候を取て逃て候。若き僧にて候が、
老僧とつれて候。いか程のび候ぬらむ

清姫は人々に、私の大切な鍵付きの手箱を盗んだ若い坊様をご存じありませんかと問いかけた。安珍を追う理由を偽った清姫の一計は『縁起』独自の表

図1



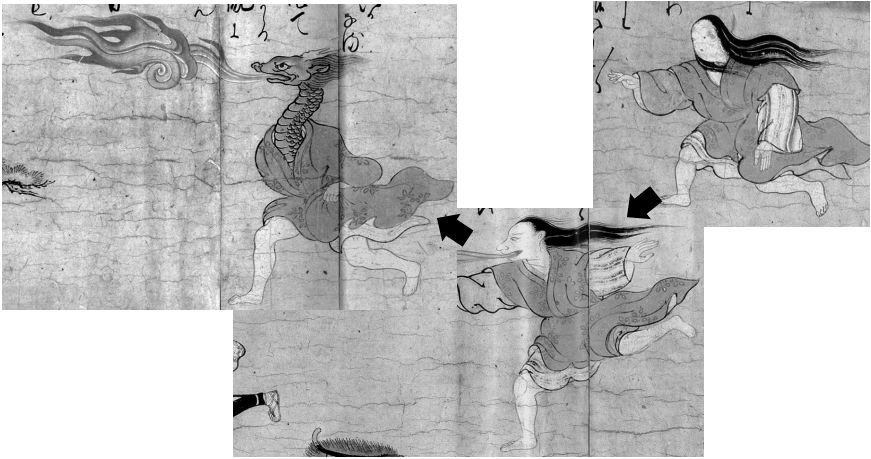
現である。痴情のもつれで男性を追うというのは外聞が悪いと判断する清姫が描かれているが、このような清姫の行動は後々理性を失っていく姿とは対照的であり、内面と外見の両方の変化を際立たせることになる。そして、改めて次の展開を画中詞から見ると、

能程の事にこそ恥の事も思はるれ。此法師めを
 追取ざ覧かぎりは、はき物もうせふかたへうせ
 よとて、走候

図2



図3



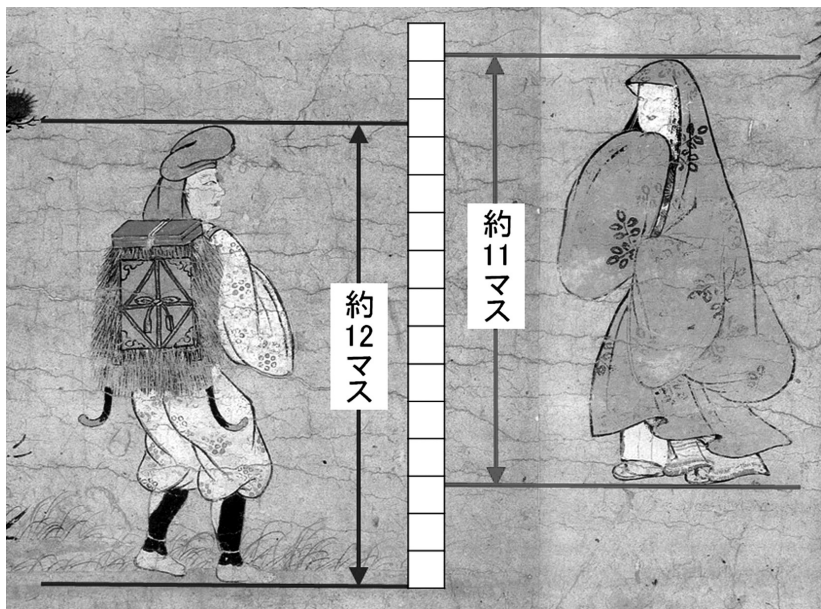


図
4

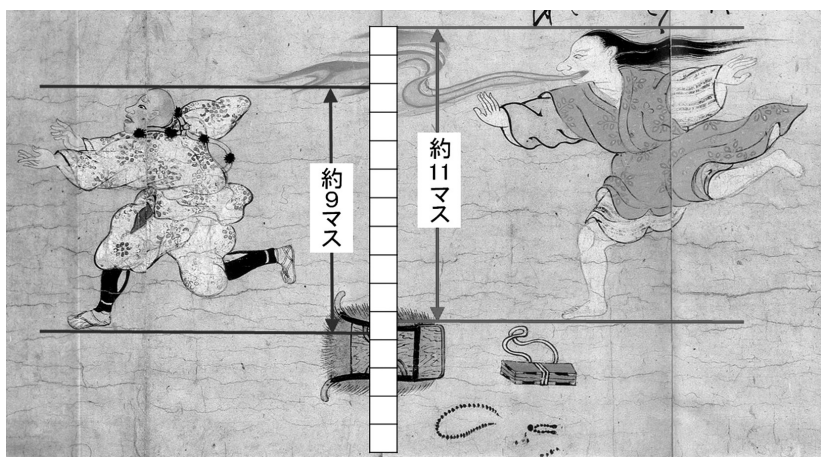


図
5

とある。ここに至り、追いかける清姫には恥も外聞もなく、履き物が脱げたことも構わず、安珍への執念にとらわれて前を見つめる(図2)。そして、画中詞では、清姫の必死の形相を恐れる人々の様子が説明され、挿絵では蛇に変化する清姫の様子が段階的に描かれている(図3)。

変化の迫力は、次第に大きさを増す清姫の身体のサイズにも現れている。二人の出会いの場面(図4)と後に安珍を追いかける場面(図5)を比較すると、安珍と大きさが変わらなかったはずの清姫のサイズは、追いかける過程において明らかに安珍を上回っている。そして、蛇と化し日高川をわたる場面では、人間とは比べものにならない大きさにまで変化しているのである。

さて、『法華験記』や『元亨釈書』の清姫は一度家に籠もり毒蛇となり、『今昔』では家に籠もった後に死んで毒蛇となる。つまり、文字資料の場合、変化の過程が簡潔であり、その後の展開には臆気な印象が残る。

一方、『縁起』は絵巻の特徴を活かし、変化の様子を長大に描くことで徐々に安珍に迫り行く緊張感を読者に与えており、同話を細やかに物語る手法を

確認することができる。

同様の効果を文字のみで表現することは難しく、仮に試みた場合は物語のテンポを乱しかねない。つまり、文字資料では十分に説明できない人物描写が絵巻では一括りに表現されているのである。

【FW報告1】

清姫が安珍を追った道筋は、富田川沿いに位置する真砂から道成寺までである。FWでは、龍泉寺の位置する和歌山県田辺市古尾周辺から道成寺が鎮座する和歌山県日高郡日高川町鐘巻を中心に、清姫が蛇に変身しながら安珍を追ったであろう道筋の一部を辿ることとした。

会津川のすぐ側に位置する龍泉寺¹には「清姫の井戸」があり、「清姫が潮見峠の捻木の所から安珍を追いかけて、宙をとんで来て、この井戸の水にのどを潤し、生気をとりもどして、道成寺をさして走り去った」と伝えられている。

龍泉寺に程近く、みなべ町の境漁港付近には、「清姫が安珍を追いかける際に袖を摺った」と伝えられる「袖摺岩」がある。現在は砕けた状態で残されているが、昔は一つの岩であったらしい。



【清姫の井戸】



【袖摺岩】



【切目川】



【切目王子跡】

海沿いを北上して切目川を渡り、切目王子跡を訪れた。『縁起』上巻二段の画中詞に「きりめ五躰王子」とある(図6)。

御坊市名田町に入ると、「安珍が唱えたお経により目がくらんだ清姫が、この石に腰を掛けて休息を取った」と伝えられる「清姫の腰掛石」がある。『縁起』上巻二段には安珍が清姫から逃げながら経を唱えた内容が見える。

また、御坊市名田町野鳥(祓井戸)の「清姫草履塚」は、

祓井戸にある。清姫が安珍を追うて来たとき、そこにあつたまつの大木に登って安珍の行方を見ると、もう日高川を渡っていた。そこで清姫は草履を脱ぎ捨てて(草履を松の枝に掛けたともいう)はだしで安珍を追ったという。一説に安珍がこの松に袈裟を掛けて逃げたので袈裟掛の松ともいい、また、袈裟掛の松は別だともいう。今はない。

と伝えられている。この「袈裟掛の松」は「清姫草履塚」とは反対側にあつたが、国道四十二号線の工事完成に伴い切り倒された。

日高川の手前、御坊市塩屋町北塩屋には塩屋王

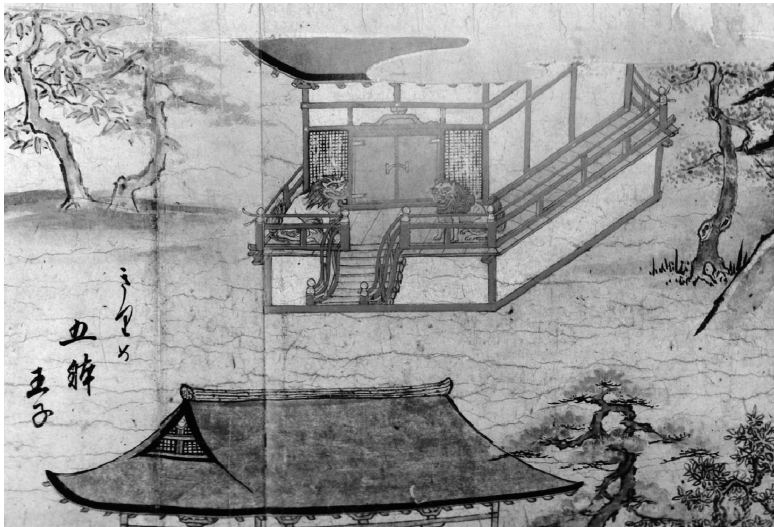


図6



【清姫の腰掛石】



【清姫草履塚】

子神社がある。『縁起』上巻二段には「塩屋と云所」とあり、塩屋王子は日高川の流れが海に入る辺りで、製塩が盛んであった。⁽³⁾『縁起』には製塩に従事する人物が描かれている(図7)。



【塩屋王子】



图
7

(1) 延暦年間、雨乞いをするため、権操僧正が大和国の布留社で薬草喻品を七日間講じると、毎日どこからか一人の童子が来て経を聞いた。七日の満願

の日、僧正が童子に何者か尋ねると、童子はこの山の小龍で、七日の聴聞のために、安樂世界に生まれることができるかと語った。そこで僧正が「雨を降らせてくれ」と頼んだ。童子は「後生の菩薩を助ければ雨を降らせようと答え、小龍と化して雷となり昇天し、雨を降らせたが、その身は砕けた。童子は五カ所に寺を建立され丁重に弔われた。龍泉寺はその中の一つであるという。龍泉寺説明板参照。

(2) 清姫草履塚説明文参照。古くは『紀伊名所図会』に「草履塚」が見える。

(3) 塩屋王子神社・和歌山県教育委員会・御坊市教育委員会「塩屋王子祠前碑解説文」参照。美人王子ともいわれるが由来不明。

1、道成寺の由来

『縁起』下巻の冒頭は道成寺の由来にはじまる。

日高郡道成寺と云寺は、文武天皇之勅願にて、紀大臣道成公奉行して建立せられ、吾朝の始、千手千眼大聖觀世音菩薩出現の靈場なり。

文武天皇の在位期間は六九七〜七〇七年で、七〇一年（大宝元年）創建と伝えられている道成寺とも時代的には重なる。そして、京都府妙満寺には正平十四年（一三五九）に鑄造された道成寺の鐘が現在も伝えられており、「文武天皇勅願せられ道成寺に鐘を冶鑄せさせらる」と刻まれ、この経緯として以下のような説話が残されている。¹⁾

当時道成寺の辺りは入江で、ある時、海人が海中を探索し、拾い上げると、それは丈一寸八分の閻浮檀金でできた千手觀音像であった。海人は庵を建てて住み、像を祀った。海人には成長しても髪が生えない娘がいたが、この像に願ったところ黒髪が生え、美しい娘となった。後にこの娘は文武天皇の后となり、后から觀音様のご利益を聞いた文武天皇が、道成寺建立の発願

を勅した。そうして海中から出現した千手観音像は、お寺の開基である義淵という僧が刻んだ、千手観音の胸中に納められたと伝えられている。

先の詞書に「紀大臣道成公」とされた人物は、現在「和歌山県神社庁ホームページ」でも紀大臣藤原道成卿（紀道成）と記されるが、紀氏の系図では確認できず藤原永谷の子に同名が確認できる。現在は道成の道成寺建立の功績に報い、文武天皇は紀道大明神の神号を道成に贈り、日高川付近の紀道神社に祀られたと伝えられている。

そして、寺の由来は千手千眼観世音菩薩の靈験で締め括られている。千手観音はこの世に生を受けた全てのものを救うため、その身に千の手と千の目を得たいと祈誓して得た菩薩で、特に虫の毒や難産への願いに秀で、夫婦和合の願いを満たすとも言われており、日本では奈良時代から信仰されている。²⁾ 下巻一段の詞書には、「又、念仏十返、観音名号三十三返申さるべし」と観音の名号を三十三返唱えることを促す観音信仰が説かれている。このように、寺の靈験を伝える物語として、下巻は象徴的なはじまり方をする。

注

- (1) 『社寺縁起伝説辞典』（戎光祥出版、二〇〇九年）
- (2) 観音（観世音の略）とは「世の衆生のその名を唱える音声を観じて、大慈大悲を垂れ、解脱を得させる」という菩薩の意。

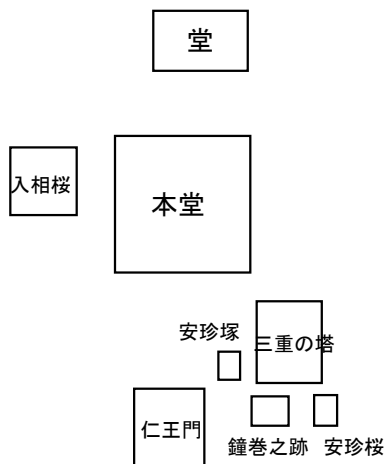
【FW報告2】

文武天皇勅願の寺であることを伝える道成寺仁王門前の石柱「文武天皇勅願所」と「大寶元年辛丑開創」。

【石柱、文武天皇勅願所】



図10 現在の道成寺



また、道成寺境内（図10）には「鐘巻之跡」、その近くには鐘を葬った場所と伝えられる「安珍塚」がある。『縁起』に見える三人の大男を境内図と合わせて読み解けば、鐘は現在の入相桜から鐘巻之跡まで運ばれたことになる（図11）。



【三代目入相桜】



【鐘卷之跡】



【安珍塚】



【二代目鐘楼跡】



【F W 報告 3】

道成寺境内の石碑「鐘巻之跡」と「安珍塚」

発掘調査では初代鐘楼があったとされる現在の入相桜の周辺から、焼けた土が出土したとされるが、伝説との直接的な関わりは不明である。

南北朝時代に二代目の鐘も制作されたが、天正十三年（一五八五）の雑賀攻め（あるいは、戦国時代、豊臣秀吉の紀州攻め）の際に持ち去られ、その二年後に京都の妙満寺に奉納された鐘が現在まで伝えられており、現在の道成寺に釣鐘はない。なお、道成寺の「二代目鐘楼跡」には、初代の鐘と鐘楼は安珍と清姫の事件で焼かれたと説明されている。

3、蛇の描き方 ― 『ひだか川』と比較 ―

『縁起』上巻三段の詞書に、清姫は日高川を渡る前に衣を脱ぎ捨てて大毒蛇となり川に飛び込んだと記されており、上記の比較資料三本にも蛇への化身が記されている。

しかし、『縁起』や『ひだか川』に描かれた挿絵の蛇は、むしろ荒々しく川を渡る龍に近い姿として描かれている。そこで、改めて蛇と龍の違いについて

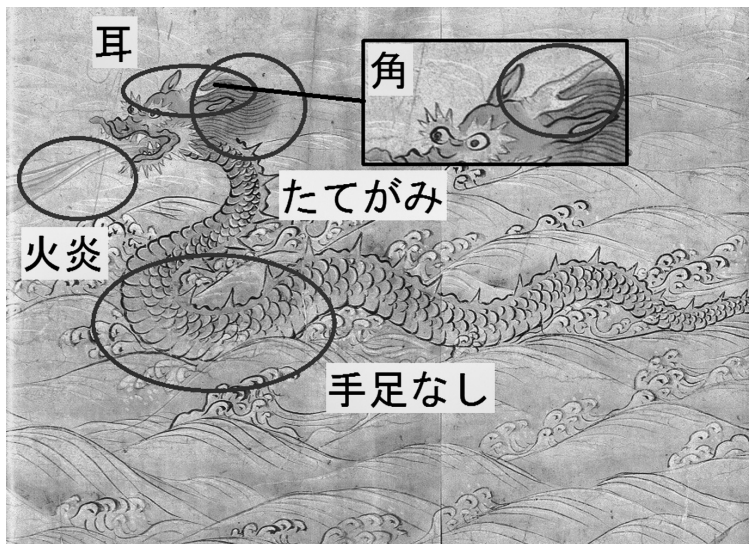


図
12

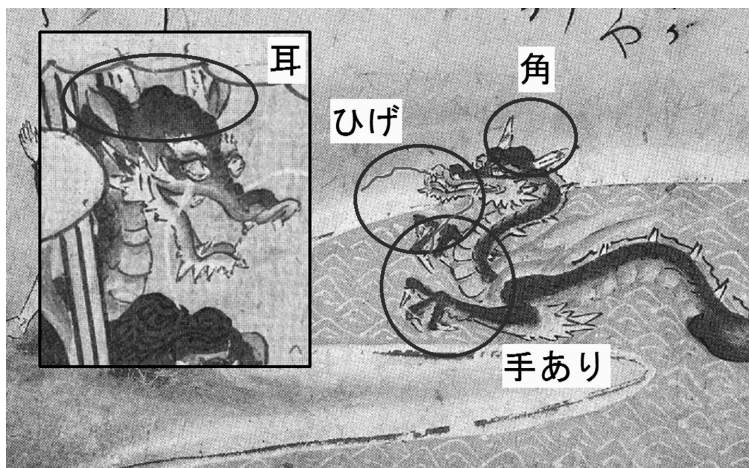


図
13

て確認しながら、『縁起』と『ひだか川』を比較する。実在の動物である蛇は体の表面が鱗に覆われており手足はなく、執念深さを表す比喻に用いられる。対して、想像上の動物である龍も同様に体の表面は鱗に覆われているが、手足、耳、角を持つ点で大きく異なる(図12)。

ここで、『縁起』と『ひだか川』に描かれた蛇の特徴について確認すると、『縁起』の蛇には耳とたてがみ、額には一本の角があり、口からは火を吐き手足がない。一方、『ひだか川』の蛇には耳と二本の角、二本の髭が生えており、三本の指を持つ手がある。どちらの蛇も本来ないはずの耳や角を持ちながら、龍の特徴を備えた蛇として描かれている(図13)。しかし、一二匹の蛇に龍の特徴を見いだすことができて、ここに描かれている動物は本文のとおり清姫が変化した「蛇」であって、「龍」ではない。では何故、龍の特徴を備える蛇の姿を描いたのか。『縁起』の結末で法華経の功德を説く点から「童女成仏」という法華経の思想を推測することも可能ではあるが、蛇と法華経の結びつきがきわめて珍しい関係とは言えない。

例えば、『今昔』には悪業のために蛇となった者

が法華経の功德で救われる話(「定法師別当、法華を説くを聞いて益を得たる語」)や、凶悪な蛇が法華経の力で改心する話(「靈淨持経者、法華を誦して蛇の難を免れたる語」)などが見える。

改めて、挿絵を持つ両書において蛇と龍が混同して描かれた理由に注目すると、物語中の蛇、すなわち清姫の行動が背景にはあると考えられる。蛇の姿になった清姫は、『縁起』では鐘に炎を吐き、中に隠れていた安珍を焼き殺す。そして『ひだか川』では鐘を砕き、隠れていた安珍を水の中へ連れ去っていく。このような行動は到底蛇の力と結びつくものではなく、この場合は強大な力を持つであろう龍に託されたと考えられる。それは、蛇に化身した清姫の執念深さも含めて、一層強く表現されることになる。

4、身を焦がす恋の行方 ― 炎と涙 ―

ここで、道成寺に逃げ込んだ後の展開をたどると以下のとおりである。

表Ⅱ・構成比較

G	F	E	D	C	B	A	
人々は驚き言葉を失う。 【詞書】	蛇が鐘を叩き、炎上 【詞書】	清姫が安珍を見つける 【詞書】	事態を不思議がる衆徒 【画中詞】	衆徒、鐘を隠す 【画中詞】	衆徒、安珍を疑う 【画中詞】	道成寺に逃げ込む	縁起
/	蛇が鐘を叩く	蛇が安珍を見つける	/	/	/	<ul style="list-style-type: none"> ・道成寺に逃げ込み大衆に歎く ・安珍を鐘に隠す 	法華験記
/	蛇が鐘を叩く	蛇が安珍を見つける	/	/	/	<ul style="list-style-type: none"> ・道成寺に逃げ込み大衆に歎く ・安珍を鐘に隠す 	今昔
/	蛇が鐘を叩き、炎上	蛇が安珍を見つける	/	/	/	<ul style="list-style-type: none"> ・道成寺に逃げ込み大衆に歎く ・安珍を鐘に隠す 	元亨釈書

K	J	I	H
<p>匹の蛇</p> <p>【詞書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数日後、老僧の夢に二匹の蛇 	<p>【詞書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女の中でも清姫は一際嫉妬深い ・悪世乱末の人々に向けての内容 ・熊野権現の靈験 ・念仏十回、観音の名号を三三回唱えること 	<p>【詞書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鎮火後、安珍は骨のみ ・人々は哀れんだ 	<p>【詞書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蛇の両眼から血涙 ・頭を高く上げ、舌をひろめかして去る
<ul style="list-style-type: none"> ・数日後、老僧の夢に先日の大蛇 	/	<ul style="list-style-type: none"> ・鐘は蛇の毒に焼かれた ・鎮火後、安珍は骨も残らなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・毒蛇の両眼から血涙 ・堂を出で、頭を高く上げ、舌をひろめかして去る
<ul style="list-style-type: none"> ・数日後、老僧の夢に先日も大きな蛇 	/	<ul style="list-style-type: none"> ・鐘は蛇の毒に焼かれた ・鎮火後、安珍は骨も残らなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・毒蛇の両眼から血涙 ・頭を高く上げ、舌をひろめかして去る
<ul style="list-style-type: none"> ・数日後、老僧の夢に先日の蛇 	/	<ul style="list-style-type: none"> ・安珍は骨も残らなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・血のような目 ・餓のような口 ・甚だ恐ろしい

O	N	M	L
<p>【詞書】 人々の熱心な読経</p> <p>【画中詞】 正直捨方便但説无上道の 読誦</p>	<p>【詞書】 老僧の夢に安珍と清姫が 現れる</p>	<p>【画中詞】 写経供養</p>	<p>【詞書】 ・安珍、清姫と夫婦にな る ・安珍は老僧に写経供養 を願う</p>
<p>・法華経の功德 聞法華経是人難 書写読誦解説難 敬礼如是難遇衆 見聞讚謗齊成仏</p>	<p>老僧の夢に安珍と清姫が 現れる</p>	/	<p>・安珍、清姫と夫婦にな る ・安珍は老僧に写経供養 を願う</p>
<p>・法華経を尊ぶ老僧 ・法華経の功德 ・老僧の心根 ・安珍と清姫の仏縁 ・愛欲と前世の因縁 ・本話は女の悪心の例話 ・女性への接近を戒める</p>	<p>老僧の夢に安珍と清姫が 現れる</p>		<p>・安珍、清姫と夫婦にな る ・安珍は老僧に写経供養 を願う</p>
/	<p>・老僧の夢に安珍と清姫 が現れる ・合掌</p>	/	<p>・安珍、清姫と夫婦にな る ・安珍は老僧に写経供養 を願う</p>

蛇に変化した清姫が鐘に巻き付く場面は、『縁起』の中でも広範囲に描かれているが、諸本との間には大きな相違が見える。

たとえば、表ⅡFに注目すると、鐘に巻きつき龍頭を尾で叩き炎を発生させる点は共通する。しかし、『縁起』では龍頭を「尾で叩く」のではなく龍頭を「啜えて」いる。尾で龍頭を叩く行為からは激しい怒りの感情が伝わるが、龍頭を啜える行為からは安珍を絶対に逃がさないという清姫の執念までもが強く印象づけられる。

表ⅡHの場面では、目から血の涙を流す清姫が印象的である。しかし、『縁起』、『法華験記』、『今昔』では両目から血を流すが、『元亨釈書』では充血した眼にとどまる。

『法華験記』、『今昔』は清姫を「毒蛇」としたことにより、清姫が化身した蛇は一層凶悪な存在となり、清姫の怒りや執念は読者に強く印象づけられていく。

ここで、挿絵に描かれた蛇に注目すると、『縁起』と『ひだか川』にはそれぞれに展開の相違がうかがえる。まず、『縁起』には蛇になった清姫と鐘のみが描かれており、背景描写はなく口から炎を放って

いる(図14)。一方、『ひだか川』では柱の存在から鐘楼と思われる空間で鐘を微塵に砕く姿が描かれている(図15)。

図14





絵解きをとおして清姫の執念、化け物の恐ろしさを強く印象づけようとする点では、『縁起』のよう
に激しく炎を放つ様子を広く描く方法が、より一層
効果的であったと言えよう。

5、結末 — 転生と供養 —

ここでは、『縁起』巻末の安珍と清姫の死後の描写を『法華験記』『今昔』と比較する。『縁起』下巻一段の詞書に以下のように記される。

或老僧の夢に見るやう、二の蛇来て、「我は鐘にこめられまいらせたりし僧なり。終に、悪女のため夫婦となれり。」

道成寺の老僧の夢枕に二匹の絡まる蛇が現れる(図16)。

この場面について、『法華験記』は以下のように記す。

上臈の老僧夢みらく、前の大きな蛇直に來りて、老僧に白して言はく、我はこれ鐘の中に籠居したる僧なり。遂に悪しき女のために領せられて、その夫と成り、弊く悪しき身を感じたり。

そして、『今昔』は、

其ノ寺ノ上臈タル老僧ノ夢ニ「前ノ蛇ヨリモ大
キニ増レル大蛇、直ニ來テ、此ノ老僧ニ向テ申
シテ云ク、『我ハ此レ、鐘ノ中ニ籠メ置シ僧也、
悪女、毒蛇ト成テ、遂ニ、其ノ毒蛇ノ為ニ被領
テ、我レ、其ノ夫ト成レリ。弊ク穢キ身ヲ受ケ
苦ヲ受ル事、量无シ。』

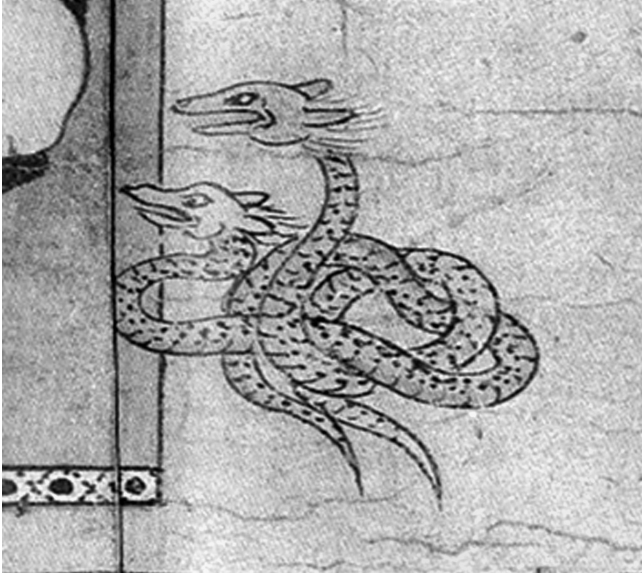


図
16

と両書とも安珍だけが巨大な蛇の姿となって現れ、悪女と結ばれたために死後は穢れた身となったことを老僧に語っている。悪女の夫となったことにより、「悪」を象徴する大蛇に化身してしまったと訴える



図
17

のである。
一方、先の『縁起』は絡まり合う二匹の蛇を描くことにより、悪縁から逃れられない男の姿だけでなく、死後もなお安珍とともに生きようとする清姫の

執念までもが描かれているのである。

ところで、同じように絵を持ちながら、『ひだか川』にこの場面はない。鐘は砕かれて入水し(図17)、安珍の弟子による読経供養が行われるのである(図18)。

図18



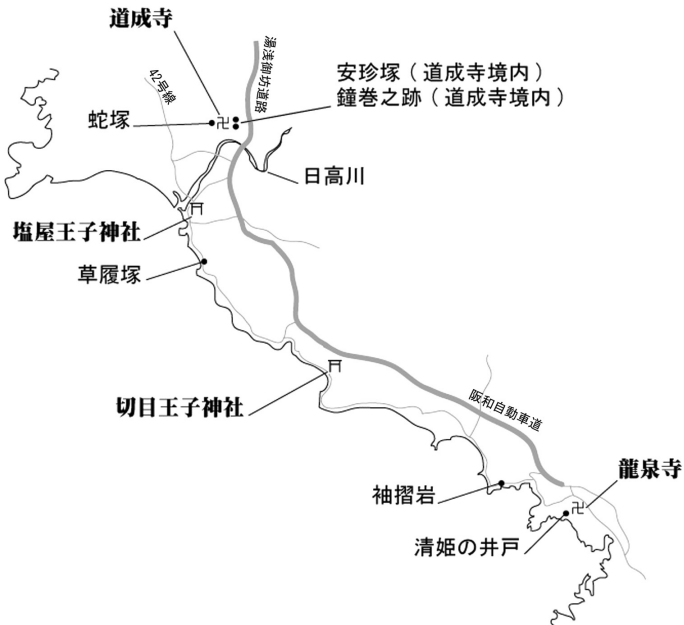
『縁起』を含めて、道成寺物語はいずれも二人を供養する法華経の功德で結ばれている。諸本の比較でも明らかのように、個々に相違する場面はもとより共通する場面でも、絵を持つことによって伝承は多様に広がっていき、物語も一層の魅力を放つのである。

【FW報告4】

『ひだか川』は、『縁起』をはじめとする伝本と系統を異にするが、その大きな違いのひとつに、安珍・清姫の最期の場面が挙げられる。そして、『ひだか川』では、安珍の隠れた鐘が清姫によって砕かれ、二人は入水するのである。

FWでは清姫が鐘の中の安珍を焼き殺して入水した、あるいは蛇に化身した清姫を埋めた場所とされる「蛇塚」を訪ねた。道成寺へと続く石段の手前の小道を左に曲がり、三分程度歩いた所に位置し付近に川は見えない。なお、同様の伝承地としては、清姫が入水したとされる「清姫渕」もあり、「清姫が女なす黒髪をなびかせながら泳いでいた場所」や「安珍に裏切られたことを悲観した清姫が身を投げた場所」と伝えられている。

【蛇塚】



【FW報告5・地図】
・FW報告内の寺、神社、史跡を地図上に示した。

おわりに ― 回顧 ―

○武下明日香

FWとして実際に伝説の舞台を訪れ、その土地の風土や、人々に触れることで、より『縁起』の物語を身近に感じることができました。多くの技法を学ぶこともでき、この研究に少しでも携わることができたことを嬉しく思っています。

○平田美月

私はこの研究会で勉強するまで、安珍清姫のことをまったく知りませんでした。けれど、調べていくうちに興味がどんどん湧いてきて、フィールドワークで伝説に関係する土地を訪ねることができ、とても良い経験になりました。このことを次に活かしていきたいと思います。

○荒谷茜

文字と絵が互いに補完しあう絵巻の考察は、広い視野を必要とされる興味深い作業でした。また、FWでは実際に絵解きを間近に見せていただきました。資料調査と現地調査が結びつく貴重な経験が出来たことを嬉しく思います。

○小塩里緒菜

幼少期に漫画で読んだ数々の道成寺伝説の元となる『縁起』を、当時より成長した今このように研究することとなりました。絵巻の研究方法を学ぶとともに、自身の成長も感じられる有意義な時間でした。

○新谷咲

絵巻を読み解くのは初めての経験でした。詞書、画中詞といった文字だけでなく、絵からも物語の考察が進むところが絵巻の面白さだと思います。今回、『縁起』を読み解いた成果を市民の方々に聞いていただいたことは、今後のいい勉強になりました。

○原知里

絵巻に描かれている場面の一つ一つを丹念に読み込み、文章からは読み取れない登場人物の心情について考察をおこなってきました。考察が進むたびに、道成寺を訪ねてみたいと何度も思いました。絵巻を読むことの楽しさを知ることができただけでなく、発表や展示、そして今回の論文執筆など、多くの貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。

○肥田伊織

約二年前に『縁起』の読み会をはじめました。試行錯誤の中、尾道商業会議所記念館での発表が決まり、発表後には、その内容を展示するという、贅沢すぎる機会をいただきました。こういった機会が研究の節目となり、その都度、考察がまとまっていったように思います。また、会員の発案と偶然が重なったおかげで、論文執筆の前にFWをすることも叶いました。今回、文章化の機会をいただき、読み会に区切りがつかまりました。

参考資料

- ・『道成寺縁起』（小松茂美編『続日本絵巻大成』十三所収、中央公論社、一九八二年）
- ・『法華験記』（『日本思想大系』七所収、岩波書店、一九七四年）
- ・『今昔物語集』（『日本古典文学大系』二十四所収、岩波書店、一九六一年）
- ・『元亨釈書』（仏書刊行会編『大日本仏教全書』所収、名著普及会、一九七九年）
- ・『ひだか川』（天理図書館善本叢書『古奈良絵本集』一

所収、一九七二年）

- ・『日本絵巻物全集』十八（角川書店、一九六八年）
- ・『新修日本絵巻物全集』十八（角川書店、一九七五年）
- ・活東子『燕石十種』（国書刊行会、一九〇八年、底本は文久元〜三年成立）
- ・高野辰之『日本演劇の研究』（改造社、一九二六年）
- ・田中一松解説『日本絵巻物集成』二（雄山閣、一九二九年）
- ・鳥居竜造『人類学上より見たる我が上代の文化』（叢文閣、一九二九年）
- ・大島長三郎『道成寺説話のインディ的典拠』（『印度學佛教學研究』二所収、一九五四年）
- ・安永寿延『道成寺説話の系譜―母權制的説話の発見―』（『文学』四所収、岩波書店、一九六〇年）
- ・五来重『道成寺縁起絵巻の宗教性』（『絵巻物と民俗』所収、角川選書、一九八一年）
- ・千野香織『日高川草紙絵巻にみる伝統と創造』（『金鯨叢書 史学美術史論文集』八所収、徳川黎明会、一九八一年）
- ・松浪久子『道成寺説話の伝承の周辺―中辺路町真砂の伝承を中心に』（『大阪青山短大研究紀要』十所収、大阪青山短期大学、一九八二年）
- ・徳江元正『道成寺譚の成立』（『室町芸能史論攷』所収、

三弥井書店、一九八四年)

・森正人「科白と絵解と物語―道成寺縁起絵巻をめぐる―」(『文学』五二巻四号所収、岩波書店、一九八四年)

・徳田和夫「絵解きと縁起絵巻」(『日本の古典文学三一 冊の講座絵解き』所収、有精堂、一九八五年)

・徳田和夫「絵解きの仕組み」(岩波講座日本文学史十六 『口承文学』一所収、岩波書店、一九八六年)

・川崎剛志「万治頃の小説制作事情―謡曲を題材とする草子群をめぐる―」(『語文』五二所収、大阪大学、一九八八年)

・阿部泰郎「寺社縁起の構造―道成寺縁起絵巻の深層構造―」(『国文学解釈と鑑賞』五十六―十所収、至文堂、一九九一年)

・林雅彦「説話と絵解き―『道成寺縁起』とその周辺―」(『国文学解釈と教材の研究』四十一―十二所収、至文堂、一九九八年)

・『日本国語大辞典』(小学館、二〇〇〇年)

・徳田和夫編『お伽草子百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年)

・「近世奇跡考」(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』所収、日本随筆大成刊行会、一九二八年)

・『大漢和辞典』(大修館書店、一九五五年)

・『尊卑分脈』二(黒板勝美編『増補新訂 国史大系』

五十九所収、吉川弘文館、一九六四年)

・『国書總目録』(岩波書店、一九六九年)

・『和名類聚抄』(八木書店、一九七一年)

・日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三年)

・下中邦彦編『和歌山県の地名』(平凡社、一九八三年)

・下中直人『日本地図帳』(平凡社、一九九一年)

・高畑勲『十二世紀のアニメーション―国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの―』(徳間書店、一九九九年)

・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版(小学館、二〇〇〇年)

・大島建彦他編『日本の神仏の辞典』(大修館書店、二〇〇一年)

・中村元『広説仏教語大辞典』(東京書籍株式会社、二〇〇一年)

・徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二年)

・小和田哲男監修『日本史諸家系図人名辞典』(講談社、二〇〇三年)

・石田瑞磨著『例文仏教語大辞典』(小学館、二〇〇四年)

・『社寺縁起伝説辞典』(戎光祥出版、二〇〇九年)

・中村元著『広説仏教語大辞典』(東京書籍、二〇一〇年)

- ・道成寺ホームページ (<http://www.dojoji.com/>)
- ・和歌山県神社庁ホームページ (<http://wakayama-jin.jyacho.or.jp>)
- ・日高川町観光協会ホームページ (<http://kanko.hidakagawa.jp>)
- ・古典籍総合データベース (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php>)
- ・清姫ツアー実行委員会事務局「清姫の想いを訪ねて」(日高振興局地域振興部企画産業課内発行)
- ・伊東史朗編『古寺巡礼 道成寺の仏たちと「縁起絵巻」』(道成寺、二〇一四年)

【付記】

一連の研究に際し、小野俊成御住職をはじめ道成寺の方々には多くの御教示を賜りました。記して御礼申し上げます。なお、以下は公開研究報告会(尾道商業会議所記念館)と、本学サテライトスタジオにおける展示の様子です。こちらでは本学所蔵の複製本『道成寺縁起』(道成寺縁起出版部、一九二九年)や研究報告会の資料を公開し、十日間の展示には五五七名に及ぶ大勢の方に御来場いただきました。併せて御礼申し上げます。

― たけした・あすか	日本文学科二年生 ―
― ひらた・みづき	日本文学科二年生 ―
― あらや・あかね	日本文学科三年生 ―
― おしお・りおな	日本文学科三年生 ―
― しんたに・さき	日本文学科三年生 ―
― はら・ちさと	日本文学科三年生 ―
― ひだ・いおり	日本文学研究科二年生 ―
― ふじい・さみ	日本文学科准教授 ―



【公開研究報告会】



【サテライトスタジオ】